

氏名	安並 貴史		
ヨミガナ	ヤスナミ タカシ		
学位の種類	博士（音楽）		
学位記番号	博第 13 号		
学位授与年月日	2021 年 3 月 12 日		
学位論文題目	E.ドホナーニの初期ピアノ作品 —— 楽曲構成と演奏技巧の観点から——		
博士論文審査委員会	（主査）	教授	岡田 敦子 （ピアノ）
	（副査）	教授	石井 克典 （ピアノ）
	（副査）	教授	武石 みどり （音楽学）
	（副査）	教授	藤田 茂 （音楽学）
	（副査）		伊東 信宏 （音楽学） （大阪大学教授）
博士演奏等審査委員会	（主査）	教授	岡田 敦子 （ピアノ）
	（副査）	教授	石井 克典 （ピアノ）
	（副査）	教授	野島 稔 （ピアノ）
	（副査）	教授	四戸 世紀 （クラリネット）
	（副査）	准教授	伊達 英二 （声楽）
	（副査）	准教授	原田 敬子 （作曲）
	（副査）	教授	武石 みどり （音楽学）
	（副査）		植田 克己 （ピアノ） （上野学園大学特任教授）

審査結果の要旨

1. 博士論文審査委員会

日 時	2021年2月12日（金） 14時30分～17時00分
場 所	Zoomでの開催
判 定	ハンガリー出身の作曲家ドホナーニ（1877～1960）について、日本語文献がほとんど存在しないなかで、その初期ピアノ作品をブラームスやリストとの比較を交えて詳細に分析し、その独自性を明らかにした本論文を博士論文として認める。
審査結果の要旨	<p>本論文はドホナーニ（1877～1960）のピアノ曲を対象として、まず第1章でドホナーニのピアノ曲をその生涯とともに整理し、第2～5章では初期のピアノ曲4曲について構造的・技巧的な観点から綿密な分析を行い、さらに第6章で初期ピアノ作品に見られる演奏技巧の種類を具体的に解析することによって、ドホナーニがどのようにして彼自身の音楽世界を獲得していったかを明らかにしたものである。</p> <p>ドホナーニについての日本語文献がほとんど存在しないだけでなく、ドホナーニの作品についての包括的かつ詳細な研究そのものがまだ行われていない現状において、その初期ピアノ作品を詳細に分析し、その変化のなかから、ブラームス的構成法とリスト的演奏技巧の交点にドホナーニを位置づけ、その独自性を描いた本論文は、実技系の博士論文としての意義を認められるものである。</p> <p>第1章「ドホナーニの作品におけるピアノ曲」は、作品の概観や分類のみならず、その生涯についても、日本語で書かれた最も多くの情報を含むものだと言える。</p> <p>第2～5章では、各章で初期の4つのピアノ曲、《4つの小品》op.2（1896）、《エンマ・グルーバーの主題による変奏曲とフーガ》（1897）op.4、《パッサカリア》op.6（1899）、《4つのラプソディ》op.11（1904）を順に取り上げ、楽曲構成の面においてドホナーニがブラームスを模範として出発しながら、やがて楽曲の各部分の連続性を強め、循環や引用の手法を用いながら「物語」的な構成へと歩んでいった道程が読み解かれている。ドホナーニの作品については、その音形、書法、民族性などが個別に論じられた研究はすでにあるが、包括的に論じた研究はなく、本論が示したドホナーニがピアノ曲において独自性を獲得していく道程は説得力をもつと言えることができる。</p> <p>最後の第6章では、リストと強い関連をもつと一般的に考えられているドホナーニの演奏技巧を、ドホナーニが残した3曲の練習曲集のなかの『指の練習 Essential Finger for obtaining a sure piano technique』（1924）を参考としながら分類し、リストとの共通点と相違点を明らかにするとともに、ドホナーニ独特の厚く複雑な音響の様態を明らかにしている。</p> <p>このようにして、ブラームス的楽曲構成とリスト的演奏技巧の交点にドホナーニの初期ピアノ作品は位置づけた本論文の考察は、実際の筆者の演奏と相俟って説得力をもつものと認めることができる。</p> <p>ただし惜しまれるのは、これら初期作品の考察結果を基に、ドホナーニの中期以降の作品をも含めて見渡す展望が示されなかったことである。今後、これら初期作品に関する考察をさらに広げ、ドホナーニの中期以降の作品についても視野に収められるようになることが望まれる。</p>

2. 博士演奏等審査委員会

日 時	2020年10月27日（火） 18時30分～19時40分
場 所	東京音楽大学 中目黒・代官山キャンパス TCM ホール
判 定	プログラミング、演奏ともに優れていると認め、審査員全員一致で合格と判定した。
審査結果の要旨	<p>演奏される機会が決して多くはないドホナーニの初期のピアノ作品のみによる正味65分間のプログラムを、まったく聴き手を飽きさせることなく、説得力をもって弾ききった演奏会であった。曲の形式や構造を熟知し、優れたテクニックを駆使し、《エンマ・グルーバーの主題による変奏曲とフーガ》作品4、《パッサカリア》作品6、《4つのラプソディ》作品11の3曲それぞれに固有の世界があることを雄弁に示したとすることができる。博士号申請のリサイタルとして、審査員全員一致で合格と判定した。</p> <p>プログラムの前半に演奏された作品4、作品6に関しては、<i>f</i>や<i>ff</i>の音色が一様に硬く、多彩なタッチや音色への一層の探求が必要であると感じられた。しかし、5分の休憩を挟んだ作品11では、楽曲との一体感、楽器との一体感が十分に発揮され、音色的にも表現的にも見事に多彩な世界が繰り広げられていた。この違いは演奏者の力量の問題というより、むしろ個々の作品がもつ演奏家を喚起する力の差によるところが大きいだろうという見解も、審査員からは出された。</p> <p>演奏者はこれまでブラームスを多数演奏してきており、この日の演奏を通して、博士論文で論じているドホナーニとブラームスとの関連を明瞭に示したと言えよう。それに加えて、随所にみられるブラームスを超える技巧性について、F.リストとの関連がただちに想起されるとしても、たんなるリストの継承に止まるものではないということをよく示した点も、高く評価できる。</p> <p>プログラム</p> <p>E. v. ドホナーニ：エンマ・グルーバーの主題による変奏曲とフーガ Op. 4</p> <p>E. v. ドホナーニ：パッサカリア Op. 6</p> <p>E. v. ドホナーニ：4つのラプソディ Op. 11</p>

以上